

中学生の部

最優秀賞

## 中学校の統合と無常観

町田市立薬師中学校

前岡 里奈

今年の夏、衝撃的なニュースが飛び込んできた。市内の小中学校を段階的に統合すると市が発表したのだ。市が作成した資料によると、「少子化」と「学校施設老朽化」が統合理由になっていった。私が通う中学校は、今年、記念すべき創立五十周年を迎えたが、残念ながら統合の対象となっていた。私が通う中学校は間もなくその役目を終える。なくなってしまうのだ。

私が通う中学校は、高度成長期の大規模開

発によって、マンモス団地とともに郊外に誕生した。一九八〇年代初頭には、市内最多の生徒が在籍していたが、一九九〇年代以降は急速に生徒数を減らしている。中学校誕生のきっかけとなったマンモス団地で、高齢化が一気に進んだ結果、地域の少子化が物凄い勢いで進んでいるのだ。団地の再生がない限り、中学校の生徒数が増える見込みはないが、駅から離れた場所にある団地に今後、多くの需要が見込めるとはとも思えない。

市の計画通りに進めば、六年後には私が通う中学校は近隣の中学校に吸収される形で統合され、現在の場所から消失する。統合相手校は一九八〇年代に、私が通う中学校の当時の学区内に新設された中学校だ。統合後の学校名には、統合相手校の名前が採用され、私が通う中学校の名前は完全に消え去る。吸収される側から見れば、「統合」ではなく、「廃校」と表現すべき計画だ。私が通う中学校の卒業生である父にとっては、本家が分家に乗

っ取られるような感じだという。

自分の中学校が消える。この決定は、在校生にとっても大きな衝撃を与えた。中学生を取り巻く世界は狭い。習い事など、学校外に世界が広がっていないわけでないが、やはりその世界はほぼ学校で占められている。統合の決定を知らされた時、あまりの衝撃に言葉を失った。いつまでも変わらずあり続けると思い込んでいた中学校が、ある日突然、なくなってしまう。私が暮らす地域は、過疎化とは無縁と思い込んでいたので、なおさら中学校の統合計画を受け止めることができなかった。父も強い衝撃を受けたようだ。「残念だけど、仕方がないな」と寂しそうに呟いていた。母校がなくなること悲しむとともに、地域から活力がなくなること心配しているようだった。

私が通う中学校は今年、創立五十周年の記念行事を行なったが、六年後に統合してしまうので、六十周年を迎えることはない。卒業

後に同級生と母校を訪れることもできない。中学校を存続させたいと思っても、地域の出生率が減り続けている状況では、生徒数が増える見込みはなく、吸収統合は仕方のない判断だと納得するしかない。

しかし、悔しさや怒り、悲しみ、喪失感、寂寥感、虚脱感などさまざまな感情が湧き上がってくる。在校生としてできることは何もなく、ただ統合の日が近づくのを待つしかない。「有終の美を飾るため、不祥事を起こさないようにしよう」と先生方は言うけれど、虚しさだけが募る。多くの在校生が寂しい思いで日々を過ごしている。統合後、使われなくなった校舎は、地域のさまざまな活動に有効利用されるというが、そんなことでは虚しさを埋めることはできない。

虚しさを抱えたまま二学期を迎え、国語の授業で平家物語と徒然草を学んだ。平家物語と徒然草の基調となるのは、無常観だ。中学校がなくなるといふ事実を受け止めること

ができずにいた私の心に、この無常観が強く響いた。これまで無常観の概念を知らなかったわけではない。四季の移り変わりや、桜の散り際に儂い美しさを感じ取り、心が揺さぶられる経験は何度も経ている。しかし、中学校がなくなるという事実は、これまで体験したものととは衝撃の次元が違いすぎて、心の整理ができずにいた。そんな時に、平家物語と徒然草に接したのだ。

この世のすべてのものは常に変化して、不変のものはないという教えに、虚しさに溢れた心が癒される想いがした。古典文学に心が動かされるとは思いもなかったが、中世のものの方々に強く共感することができた。中学校の統合を拒絶する気持ちが和らぎ、少しだけ楽になったように感じた。これほどまでに心に深く滲みるものかと、自分でも驚いた。何人かの同級生も、私と同じように中学校の行く末を無常観に重ねて読み、理解を深めていた。

中学校がなくなるという虚しさを抱えた、このタイミングでなければ、平家物語と徒然草への接し方は違ったものになっただろう。私は国語の科目がそれほど得意ではないので、嫌々読んでいた可能性もあった。しかし、平家物語と徒然草は、学校の授業で習う以上の深い味わいを、私に与えてくれた。巡り会うことができ、本当に良かったとしみじみ思う。

(東京都町田市)